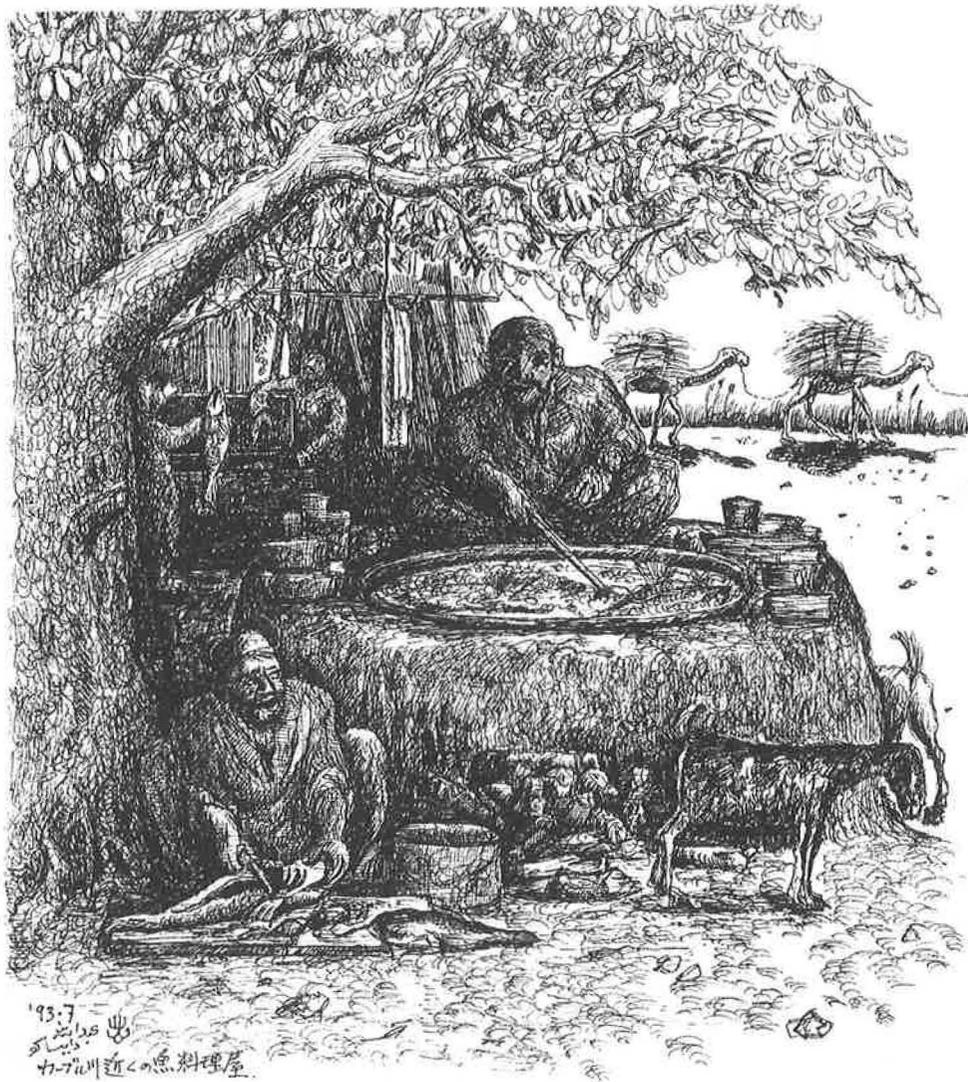


# パシヤワール会報

No.36



ベ  
シ  
ヤ  
ワ  
ー  
ル  
会  
一  
丁  
目  
一  
〇  
一  
二  
五  
上  
村  
第  
二  
ビ  
ル  
三  
〇  
七  
号  
福  
岡  
市  
中  
央  
区  
大  
名  
電  
話  
・  
F  
A  
X  
〇  
九  
二  
（  
七  
三  
一  
）  
一  
三  
七  
二

## ベシヤワール会10周年 ● 1992年度報告

- 多くの人々の献身的な働きに支えられて…………… 問田直幹
- 私たちの活動はあまりに小さく人々のニーズは日増しに高まる …… シャワリ・ワリザリフ
- 時代に迎合せぬ不動の石でありたい…………… 中村 哲
- カブールの権力闘争よそこに地方に平和、田園は緑に…………… 中村 哲
- 患者さんのキャラクターに支えられて…………… 倉松由子
- 鳥の鳴き声で一日が始まる…………… 豊崎朝美
- ミッション病院の人々…………… 藤田千代子
- 中村医師の男振りに喝采…………… 古曳正夫

カーブル川近くの魚料理屋 \* 表紙絵 甲斐大策

ベシヤワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

# 多くの人々の 献身的な働きに支えられて

## ●ペシャワール会創立十周年に際して

会長 問田直幹

ペシャワール会が創立されたのは、この間のよう  
に思っていたのに、このたび十周年の記念日を  
迎えることになった。このことは、主役である中  
村哲君の人的魅力や実行力によるのは勿論であ  
るが、このような会としては珍しく実に多くの方  
方の献身的奉仕によって支えられてきたことを忘  
れてはなるまい。

そして、その背後では副会長の高松勇雄博士を  
はじめ多数の理事の方々が面倒を見て下さって  
いる。そして事務局長として運営の実際的な仕事  
の中心となってくれているのが、九大医学部で私  
の授業を受けた村上優君である。

村上君は初代事務局長であった今はなき佐藤雄  
二君の二年後輩であり、佐藤君と同じく国立肥前  
療養所の所員である。九大医学部の卒業年次でい  
うと、佐藤君が一九七二年（昭和四七年）、村上  
君が一九七四年（昭和四九年）、そして中村哲君  
が一九七三年（昭和四八年）であるから、中村君  
は一年先輩と一年後輩に面倒を見てもらったし、  
また今も見てもらっていることになる。もちろん  
二人ともペシャワールに出かけて行って、中村君  
の働きの場をよく見て来てくれたのである。

私自身もぜひ一度ペシャワールに出かけて行っ

て中村君の働きの舞台や働きぶりを見て来たいと  
思っているうち今年の二月に、思いがけなく第一  
腰椎の骨折を起こし、当分現地に行けないのは残  
念である。もともと私も、もう三十六年前のこと  
になるが、文部省から派遣されてセイロン（今の  
スリランカ）、インドそしてパキスタンを約一ヶ  
月かけて視察して廻ったことがある。当時のパキ  
スタンは東パキスタン（今のバングラデッシュ）  
と西パキスタンから成り、私は名古屋大学の教授  
と東のダッカにも行ったが、西はカラチとラホー  
ルを訪れて文部省にあたる役所やいくつかの大学  
を訪問したことがある。それでパキスタンには親  
近感を持っており、今年あたりは村上事務局長と  
同道しようかと思っていたのに当分行けそうにな  
いは残念である。

ここで少し過去のことをふりかえって見たい。  
中村君がペシャワールで医療奉仕をしたいと言っ  
て中村学園大学の私の部屋を訪れて来たのは一九  
八一年のことだったと思う。私が理事をしていた  
日本キリスト教海外医療協力会（JOCIS）が募  
集しているペシャワール・ミッション病院で働い  
てみたいという。私は長年JOCISの理事であっ  
たが、自分の教えた学生から海外の医療奉仕に参

加しようという者が現れるのを長いあいだ心待ち  
にしていたのだ。かつてJOCISが事業を始めて  
間もない一九六一年のことであるが、米子の鳥取  
大学医学部に赴き私の中学、高校、大学での後輩  
である田中潔医学部長に面会、公衆衛生学の助教  
であった岩村昇君を大学を二年間休職のままネ  
パールに派遣して働くことを許可してもらいたい  
と申し出て快諾して貰ったのを思い出す。

その後も多数の医師、保健婦、看護婦が各地か  
ら応募して下さったのに、私の教えた学生からの  
応募がないのを淋しく思っていた。そこに中村哲  
君が現れたのである。私は彼の後援会が計画され、  
私を会長に、とのお話があった時、喜んで引きう  
けたのである。

その後、何が最も大切かを見つめて行く中村君  
の働く場所は変り、JOCISとも縁を切った形に  
なったが、中村君に全幅の信頼をおくペシャワー  
ル会の会員は、彼の働きがよい方に発展するよう  
にと願い、支援して下さっているのである。

私たちは、中村君がペシャワールで活動しはじめ  
た時とは派遣母体も変り、活動の舞台も変った  
が、その活動ぶりを見守り出来るだけの支援を惜  
しまないようになりたいものである。

最後に、中村君のため、わざわざ現地に赴き、  
種々配慮して下さった、今はなきJOCISの奈良  
常五郎主事、中村君の担当理事であったJOCIS  
の長崎太郎氏、中村君のペシャワール行きのきつ  
かけを作って下さった福岡登高会会長であった新  
貝勲氏、そして最後に中村君のためJOCIS時代  
からペシャワール会事務局長として亡くなるまで  
努力を惜しまなかった、佐藤雄二君、これらの方  
々のみ霊安かれと切に祈るものである。

# 私たちの活動はあまりに小さく 人々のニーズは日増しに高まる

## ●親愛なる兄弟友人の方々へ

日本を遠く離れたこのペシャワールの地で、私たちは、日本の唯一の非政府機関、ジャパン・アフガン医療サービス（JAMS）で最善を尽くして懸命に働いています。このJAMSは、現在、おもに医療部門（内科）において、とくに現在もまだバキスタンの北西辺境州に残っているアフガン難民の人々のために可能な限りの医療行為をおこなっています。

同時に、この診療所を通じ、アフガン内部の地元民への医療サービスも行いつつあります。現在、アフガンの人々は、十四年に及ぶ戦闘そして悲惨な生活を経て、徐々にではありますが、故郷へと戻りつつあります。そこでは全てが破壊され尽くしています。家屋も、水路も、農地も道路も、学校も病院も、診療所も、共同体のすべての施設がめちゃくちゃにされています。

さらに、人々の倫理感も大きな危機に晒されています。家族間のこれまでの関係は、劇的な変化を見せ始めています。（数多くの家庭では、身内が殺され、誘拐され、負傷し、身体に障害を持っています。）これは何もロシアの侵略とそれに続く傀儡アフガン政権下の十四年間に限ったことで

JAMS所長 シヤワリ・ワリザリフ

はありません。現在でも、内戦の悲劇は続いているのです！

この様な状況下にあつて、私たちの活動はあまりに小さく、他方、人々のニーズは日増しに高まる一方です。私たちは、親切で誠実な日本の友人達、寄付者の方々に支えられた、この小さいながらも有益な事業を継続すべく、努力を続けています。そして、世界のこの地域で困難に直面している人々を助け、山積する問題を解決していきたいと考えています。

ドラエ・ヌール、ドラエ・ピーチ、テメル・ガールの各診療所と四十五床の入院棟を擁するペシャワールのジャパン・アフガン医療サービスの本拠地は、支援者の方々のほとんどの皆さん方にはすでに馴染みのある名前かと思いますが、これらの診療所では、医療・事務系を合わせ八十五人のスタッフが働き、毎日約五百人の患者を診療、七百人以上の人々がこの検査室で様々な病理検査を受けています。そして毎月五十人以上の患者を入院させて治療しています。その他、七十人以上の患者が、特殊な病理検査を毎日受けています。

この様な状況にあつて、私たちに今、何ができ

るのか考えなければなりません。

もちろん、皆さんの思いやり溢れる、誠実な支援が長期に、そして定期的に継続されることが最も重要です。ですから、私たちは皆さんの経済的・技術的な援助と支援とを期待し、私たちの活動の能力や効率を改善させたいと考えています。

私たちが互いに手を取り合い、困難に直面している他の友人・家族の問題解決に手を差し延べてあげていけば、いずれ私たちが生きていくうちに何を成したかは、時が語ってくれるでしょう。

何も持たない人々、彼らは持っていたもの全てを「風と共に去りぬ」とも言えはいいでしょうか、失ってしまった人達ですが、彼らの置かれた状況やその困難を共に経験することなくして、彼らのことを理解することは出来ません。

もし私たちが人類に対してもっと思いやりを持つことができるならば、もっとお互いを近く感じることが出来るし、人類の共存という人間的な目的を達成するための確固とした礎石を築くことが出来るのではないのでしょうか。



ドクター・シヤワリ

# 時代に迎合せぬ 不動の石でありたい

## ●ペシャワール会十年の歩み

中村 哲

### ●二人三脚

福岡市の一角で、毎週水曜日の夕べともなれば小さな集まりが行われる。集まりと言っても、至って簡素かつ楽しい雰囲気、二〇名前後の有志会員の手で事務作業が進む。初めて訪れる者は、まさかここが、パキスタン北西辺境州のペシャワールに本拠を置くJAMS（日本・アフガン医療サービス）を支える目立たぬ根拠地だとは、想像できないだろう。

ペシャワール会（問田直幹会長）は一九八三年九月に結成された。以来十年、会は黙々と現地事業に専念、現在では二五〇〇名の会員がいて、年間六千万円に及ぶ現地活動費の募金、情宣活動、必要物資の調達・輸送、日本からの人材派遣が行われている。我々には大仰な「国際協力の哲学」もないが、七面倒な論議ぬきに、実質的な現地協力力で心を合わせ、立場を超え、思想信条を超えて、官民を問わず、無数の良心的協力で運営されている。まさに、現地・日本の良心を合わせる二人三脚である。

さりげない外観にもかかわらず、会の構想と活

動規模は雄大である。ペシャワール・アフガニスタン現地の事業そのものが、ゼロから始まった十年の努力の着実な成果を雄弁に物語っている。プロジェクトは二つある。一つはパキスタン北西辺境州のらい根絶計画の支援で州唯一のらい治療センターを支え、もう一つは内戦後のアフガニスタン復興支援で、その北東山岳地帯の広大な無医地区に「農村医療計画」を初志一貫して継続している。直接会が支える現地スタッフは九五名、過去日本から赴いたボランティアは三〇名以上、アフガニスタン関係の四つの診療所だけでも年間十万人以上を診療し、さらに拡大しつつある。住民の厚い信頼を得て、両者とも今や現地に不可欠の存在となった。

### ●最後の米ソ激突

奇しくもこの十年は、世界史的な激動期に対応する。「アフガニスタン」はまさにその象徴的な集約点とも言えた。この間冷戦構造下最後の米ソの激突たるアフガン戦争、ソビエト連邦の解体、湾岸戦争などのイスラム世界の台頭の余波を現地は直接被った。伝えられざる現地事情の中で悪戦



ダラエ・ヌールでJAMS・スタッフと共に

苦闘しながら、我々自身が思いもかけず認識を新たにすることが多い。「協力」に意気込んで始めたところが、現地の現実に直に接して気づかなかったことに気づき、忘れたことを思い出し、我々の方が豊かになったとも言える。

日本ではもう余り記憶されていないが、かつてソ連軍侵攻とモスクワ・オリンピックのボイコット、二百万人の死者と六百万人の難民を出したアフガン戦争を想起する者も居よう。一九八八年のソ連軍撤退・難民帰還協力、一九九二年のカブールの権力闘争と、断片的に情報が伝えられたまま、三度「アフガニスタン」は世界の関心から遠ざかった。

だが、「国連を通しての国際貢献」が明らかな形で打ち出され、ひいては湾岸戦争の協力からカ

ンボジアPKOへと日本を導き、戦後国論を二分した憲法論議に新たな局面をもたらしたのも「アフガニスタン」だったことを知る者は少ない。

国際化時代が叫ばれながらも、アジア世界に関する限り、案外我々の「国際的認識」はあやふやなものであることが分かる。移ろいやすい関心と歩調を合わせて、現地の実情は似ても似つかぬ虚像を日本で残したまま忘れ去られようとしている。あれほど沸いた「アフガニスタン復興支援・難民帰還援助」の大規模な国際支援は実効を見ぬまま放棄され、かつて三百を越えた国際「援助」団体は騒ぎを残して現地を去り、パキスタン三〇〇万人の難民は独力で帰還して、独力で復興に動んでいる。「混乱を極める」はずの政情をよそに平和な光景が農村部には広がり、新世界秩序の担い手たる国連は人々から嘲笑されている。BBCの報道で仕立てられた「指導者」たちは力がなく、テロのイメージを伴ってセンセーショナルに喧伝された「イスラム」も、実は人々の間では寛容な多様性を以て健在である。欧米勢力の介入によって混乱は混乱を加え、平和は住民自らの手で防衛された。

●二百万人の死者の意味

アフガン戦争の、あの二百万人の犠牲の意味はいったい何であったのか。復興援助という名の巨万の浪費は何であったのか。軍事援助と復興支援が同時に強行されるという国連の失態は反省されたのか。国際秩序は誰のために存在したのか。それに踊らされた上、現地住民の間で評判を落として

た日本の無念は自覚されたのか。いや、これら事実を知らされざえしたのか。そして、このあやふやな認識の上に「国際貢献」が論じられ、いやしくも国民の基本指針たる憲法に影響を与えらるれば、そら恐ろしい事だと言わねばならない。

これらを語ることは、私には気が重い。日本で「国際〇〇」の議論や催しものを聞くごとに寂しい思いをする。「復興支援」が切実に求められている今、我々は活動に忙殺されて議論に加わる暇もない。しかし、「知られざるアフガニスタンの民の現実」を回顧するとき、二百万人の死者が叫ばずば、私が沈黙を通す気にはなれない。

●「JAPAN」

日章旗を描いたJAMSの車両が、医薬品を満載して東部アフガニスタンの山岳地帯を駆け巡り、現地住民は親しみを込めて「JAPAN」を想起する。皮肉なことである。我々は何も日本の宣伝を企図した訳ではないが、撤退する欧米諸団体を尻目に現地でのJAMSと日本の評価は高まり、逆に日本では「アフガニスタン」が忘れ去られる。「ペシャワール会」という取るに足らぬ地方の小さなグループが、薄れた関心の中で青息吐息で補給を支えているなど、現地では誰も想像しないだろう。

規模の大きさが必ずしも良いとは限らないが、我々の活動は国際的に決して恥ずかしくないものである。現地の実情に通じ良心的協力を実らせる点において、他を圧するものがあると言っても誇張ではない。だが、これを築くためには多くの試

行錯誤と殉職者まで出し、幾度かの財政危機もくぐり抜けてきた。ワーカーを通して異文化の壁を超えるまでには、日本・現地双方に痛みも強い。



ペシャワール会一〇年の軌跡は、自分も予想しなかつた地点に我々を立たせ、赤裸々な現実の中で我々自身を問うてきた。「一隅を照らす」とは私の好む言葉である。我々は現地との深い関わりを縁として日本の良心を束ね、何十年かかって事業を完遂し、共に歩んで労苦と豊かさを分かち合い、以て人間と自らを静かに問い続けるよすがともしたい。内外共に戦後最大の転機に直面する現在、うわべの時流に木の葉のごとく漂うのも石のごとく沈むのも自由なら、我々はあえて時代に迎合せぬ不動の石でありたい。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッシェン病院に赴任。らしい

のコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS(ジャバン・アフガン医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創作をめざしつつ現在に至る。著書に『ペシャワールにて』(石風社)『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房)『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

# カブールの権力闘争よそに 地方に平和、田園は緑に

## 1992年度を振り返って

カブールが混乱すればするほど、地方に平和が拡がり、大部分が農民であった難民たちは、一千万発と言われる地雷をものともせず、自力で復興を始め、現在アフガニスタン全土に緑の耕作地が拡がりつつある。

JAMS 顧問医師 中村 哲

### 一九九二年度の概況

一九九二年度の大きな動きは、一九九二年四月に始まるカブールの政変でナジブラ旧政権が倒れ、難民帰還が爆発的に開始されたことである。一九九二年秋までに約百数十万人が帰郷、残る百万人も大半が一九九三年中には帰るものと見られる。一方、カブールでは果てしない権力闘争が続き、一九九二年八月から各派軍民が大規模な衝突を繰り返した。この結果、一九九三年二月までには市街の相当な部分は灰燼に帰し、二百万人のカブール市民は一齐にアフガニスタンの各地に退避した。市内は一時、一部を除いてもぬけの殻となり、首都カブールは事実上壊滅した。このため知識層のかなりがペシャワールに逃げ、帰郷する難民と明暗を分けた。

国連、国際赤十字、各国NGO（非政府団体）のほとんどが一九九三年三月までに名実共に活動を停止、現在残った小規模な団体の手によって、細々と救援が行われている状態である。なお、保健医療関係では、一九九三年三月現在、小児診療所とJAMSとを除いてペシャワールで実質的な診療をする機関はなく、残った難民とカブールの避難民が殺到、大きな負担となった。

名目上は百三団体がアフガニスタン側のジャラバードに居を移し、政治的安定の機をうかがっているが、現在のところ見るべき活動はない。ほとんどの団体は動きがつかず、医療関係では実質的に山村地域で活動しているのは、東部では例外

### 1992年度の JAMS 全体の診療業績

全診療所外来診療数：108,005名		全診療所総検査件数：74,111件	
<b>(ペシャワール診療所)</b>			
外来患者総数	45,029名	総検査件数	43,410件
入院患者総数	667名	血液一般	8,999件
手術件数	124名	生化学検査	3,246件
キャンプ診療回数	12回(12日)	尿・便検査	22,346件
キャンプ診療患者数	4,065名	X線撮影	3,710件
母親教室	6,215名	その他(ECG・EEG・病理)	3,550件
		腹部エコー	1,559件
<b>(テメルガール診療所)</b>			
外来患者数	13,093名	総検査件数	9,283件
<b>(ダラエ・ヌール診療所) *</b>			
外来患者数	36,634名	総検査件数	19,379件
<b>(ダラエ・ビーチ診療所)</b>			
外来患者数	2,282名	総検査件数	2,039件
*1993年1月-3月の3ヵ月間。1992年は正確な記録なし。			

診療患者の大半は、マラリア・腸チフス・アメーバ症などの感染症、外傷などに対する小外科処置である。

的にJAMSだけと言ってよい。

JAMSではダラエ・ヌール診療所を更に充実すると共に、ダラエ・ビーチ診療所を昨年十二月に開設、断食月明けに伴って現在始まった第二次の帰還ラッシュに備えている。

一九九一年度に引き続き、検査部を充実して人

員を増し、ペシャワール診療所は医療教育機関としての性格を持つようになった。総診療数は前年度の二倍以上の伸びを見せた。

母子衛生へのニーズも高く、将来のために「母親教室」も継続されている。

### JAMS活動の概況

#### 1. アフガニスタン復興支援

(農村医療計画)

一九八八年以来JAMSは、アフガニスタンの山村無医地区に診療所を配備する計画を立て、公衆衛生活動も含めた無医地区のモデル医療態勢確立を企ててきた。これまではほとんど伝統社会と共存できなかった外国人の保健衛生プログラムとは異なっており、独自の現地方式で地元で溶け込み、疾病の予防を含めた地域医療活動を現地の人々の手で、実現しようとする計画である。あわせて、らしい多発地帯に活動を展開、一挙にらしい根絶計画にも寄与しようとするものである。

#### アフガニスタン国内診療所の開設

(ダラエ・ヌール診療所)

一九九一年度を開始されたダラエ・ヌール診療所は、一九九二年度にタイムリよく難民帰還の時期と一致し、住民に測り知れぬ安心感を与え、地域での難民帰還促進には大きな役割を果たした。患者数は爆発的に増え、年度末までには同溪谷の

約九割の住民が帰郷した。現在、JAMSは「診療カード」の配布で同定番号を定め、これを整理して事実上の戸籍登録実施を開始、二年後をめぐりにワクチン接種や疫学調査の下地を作りつつある。

ダラエ・ヌール溪谷は典型的なアフガニスタン山岳地帯で、人口約七・八万人、下手はアフガン戦争中に爆撃で荒廃していたが、現在、この一年でほとんどの耕作地が復興している。診療所の外来数は一日約二百名、十二名のスタッフ(医師一・検査技師二・看護士二・助手三・その他)が常駐する。

(ダラエ・ピーチ診療所)

らしい多発地帯(クナール州の七〇―八〇%のらしい患者が居住)であるダラエ・ピーチ溪谷では、一九九二年十二月に準備を始め、一九九三年二月から少しずつ診療活動が始まっている。同溪谷は長大でダラエ・ヌールの数十倍と大規模で、現在のところ礎石を置いたに等しい。クナールの州都チャガサライは治安が悪いため、三時間上流のシンゾー村に置かれた。

現在、医師一、検査一、看護士・助手四を含む十一名のスタッフが常駐、一日外来数百名のペースで診療が行われており、さらに増加することが予想される。地域では次第に重きをなしつつあるが、遠隔地のヌーリスタンから数日かけて来る患者も多く、輸送の困難も大きい。補給に応じた拡大をしないと、足をすくわれる。ただ、らしい根絶計画の要衝であるから、多少の軌道修正はあっても、診療所をたたむことはあり得ない。

#### (ペシャワール基地診療所の拡充)

一九九一年度に引き続き、検査部を充実して人員を増し、ペシャワール診療所は医療教育機関としての性格を持つようになった。総診療数は前年度の二倍以上の伸びを見せた。

母子衛生へのニーズも高く、将来のために「母親教室」も継続されている。

#### 2. らしい根絶計画への協力

ペシャワール・ミッション病院

らしいセンター

入院治療サービスは、日本から医師一・看護婦二名・理学療法士一名が派遣されたが、人員不足

#### 1992年度の業績 (ペシャワール・ミッション病院)

##### (入院・外来治療サービス)

総外来数	約1200名	総手術例	62例
総入院数	422名	菌検査数	544例

##### (サンダル・ワークシヨップ)

1992年度総生産数	445足	総配布数	375足
------------	------	------	------

##### (ペシャワール地区・フィールドワーク)

出動回数	21回
------	-----

##### (ペシャワール大学・カイバル医学校の医学生への講義)

講義回数	18回	受講者数	222名
------	-----	------	------

による負担はなお解消していない。しかし、カラチのマリー・アデレイド・レブローシー・センターの方針転換で、名実ともに「治療センター」とされ、公営フィールド・ワーカーたちとも、これまでに緊密な協力態勢作りが実現した。

### 3. 日本からのワーカー派遣事業

一九九二年度は、藤田看護婦(三年)、栗林看護婦(三ヵ月)、倉松理学療法士(二年予定)、レントゲン技師(三ヵ月)、小林医師(二ヵ月)、長谷川医師(三ヵ月)が赴いた。しかし、充分な準備と柔軟な適応力が思ったより大きく要求され、ボランティアの対応に追われて機動力が落ちる状態がなかったとはいえない。

だが、長期ワーカーの働きは目ざましく、とくに北西辺境州におけるらい根絶計画で、最も必要性の高い女性患者発見のフィールドワークに協力、これを介して政府厚生省関係者との協調が確実に進んだ。また、事務系のボランティアの働きも極めて有用で、日本との連絡などで大きな役割を果たし、機能的となった。豊崎氏が一九九三年三月よりJAMSの事務で働いている。

## 一九九三年度事業計画

①アフガニスタン無医村診療態勢確立による復興支援

②パキスタン北西辺境州・アフガニスタンのらい根絶計画支援

以上の大目標に変更はない。一九九三年度目標

としては、以下の計画を立てている。

### アフガニスタン国内診療所

一九九二年度は、ロシア・中東情勢と絡んで政治的な混乱そのものは続く。しかし、帰還難民はさらに増え、国内活動を展開しやすくなる。一九九三年度は開設されたばかりのドラエ・ヌールとドラエ・ピーチ溪谷の診療所を充実、来年度へ向けて疾病予防の母親教室、結核・らいなどの慢性感染症に対する登録制・定期投薬態勢を完成させる予定である。プランはほぼ予定通り進行しつつある。

### ペシャワール診療所の教育機能充実

大規模ではないが臨床訓練施設とする。態勢の整った教育コースとしては特に開設しない。医師のみならず、検査技師、医療助手、X線技師などの技術も現地アフガン人が自然に学べるようにする。ただし、国内診療所での実地指導に重点をおく。

### ミッション病院らい病棟・

### 北西辺境州らい根絶計画協力

従来通り、らいセンター診療能力を増すと共に、らい根絶計画の弱点、女性患者の早期発見と遠隔地患者の治療サービスに力を入れる。既定方針に変更なし。

## JAMSの沿革と現況

### 組織の沿革

JAMS (Japan-Afghan Medical Service) 日本アフガン医療サービス)の旧名称は、一九八六年以来、日本側の民間援助で支えられてきた Afghan Leprosy Service だ、パキスタン政府公認の独立した難民医療団体であり、パキスタン北西辺境州の公的医療機関とも密接な協力関係がある。日本側本部・ペシャワール会の活動が開始されたのは一九八三年九月、現地活動が始まったのは一九八四年五月である。当初はペシャワール・ミッション病院のらい病棟を中心に協力していたが、当時の現地事情から難民キャンプに活動を拡大する必要に迫られ、現在のJAMSが発足するきっかけとなった。正式にパキスタン政府より活動が認められたのは一九八六年十月、州政府ベースのらい根絶計画と歩調を合わせて開始され、初めは難民キャンプでのらい患者の早期発見と定期投薬治療が中心であった。

だが、絶対的に医療の欠乏する難民キャンプでは、比較的少数のらい患者だけではなく、一般的な病気も診ざるを得なかった。一九八八年秋より方針を転換して診療対象を一般疾病にも拡大、さらに政情の変化に伴って、アフガン内線後の国土再建の一翼を医療側から担うべく、長期的展望で再編成され、人材育成に力を注ぐと共に、アフガニスタン北東部に活動を延長した。一九九一年十

## 関連資料

### 現地主要協力団体

Mission Hospital, Peshawar (Leprosy Centre)	Mental Health Centre, Peshawar
Lady Reading Hospital (Leprosy Unit)	北西辺境州政府厚生省 (結核・らいコント
Marie Adelaide Leprosy Centre (カラチ)	ロール委員会)
カイバル医学校 (ペシャワール大学)	パキスタン連邦政府・難民コミッショナー

### JAMSの現況 (1993年4月1日現在)

#### スタッフ (総数87名・うち日本人1名、現地86名)

医師	19名	看護師・助手	20名
検査技師・助手	18名	運転手	6名
門衛	8名	料理人	3名
事務	3名	掃除夫	3名
レントゲン担当	3名	薬剤師	1名
絨毯ワークショップ	2名		

一応JAMSとは別に、ミッション病院らい病棟で以下のワーカーを雇用。

靴ワークショップ	3名	病棟助手	3名
----------	----	------	----

### ペシャワール診療所サービス

病床数	44床
一日外来件数	150-200名
外来検査数	100-150件/日

二月よりアフガニスタン山岳無医地区二カ所に診療所を開設、諸外国の援助の停止する中、着実な歩みを続けている。

当然らしいはもちろん、現地で多い一般的疾病だけでなく、母子衛生にも力を入れている。さらに、疾病の早期発見と予防的局面を重視し、保健診療員の教育など現地の「人づくり」は大きな目標である。

財政的基盤は、ほとんどは良心的な日本の市民団体・病院組織など民間団体の手になり、一部が郵政省ボランティア貯金や政府NGO補助金(一九九二年度は両者で全体収入の約三十二%)でまかなわれている。また、日本のボランティアの受け入れも行っている。スタッフは、ほとんど全てアフガン人である。近代的装備で訓練された外国人チームとは質量とも比べべくもないが、「地元勢による地元の人々のための仕事」ということを我々は最優先課題としており、いかに遅々たる歩みでも、「自力更生援助」を固い方針として、傍らから励ましつつ共に歩むことに徹している。

また、北西辺境州のらい根絶計画については、ミッション病院のらいセンターを支え、フィールドワークの協力を通して北西辺境州政府プログラムに直接協力している。カラチのマリー・アデレイド・レブローシー・センターと並んで、北西辺境州のらい根絶計画の実質的な屋台骨の一つであるが、決して正面に出て業績を誇示せず、関連機関を背後から強力に支える方針を採っている。

一九八九年一月から、本部を日本側(ペシャワール会)に置き、日本-アフガニスタン合同の民間組織であることを鮮明にした。

### 主要院外医療サービス

1. フィールドワーク（難民キャンプ診療）;現在中止
2. らい診療施設から依頼される臨床検査・接触感染調査
3. ペシャワールらいセンターへの手術など技術協力・コンサルテーション
4. テメルガール支部・診療サービス（北部国境地帯・医師1名、検査技師1名が常駐）

#### ダラエ・ヌール診療所（アフガニスタン国内）

スタッフ総勢11名（医師1、検査2、助手5、門衛2、伝令兼運転手1）を交代で配備。

外来;100-200名/日

検査;60-100名/日

#### ダラエ・ピーチ診療所（アフガニスタン国内）

スタッフ総勢11名（医師1、検査2、助手4、門衛1、料理人1）を交代で配備。

外来;100名/日

検査;60-70名/日

### JAMS主要責任者

DIRECTOR	Dr. Shawali Walizarif M.D.
MANAGER	Mr. Mohamed Yakob
ADVISOR	Dr. Tetsu Nakamura M.D. (中村 哲・ペシャワール側担当)
GENERAL SECRETARY	Dr. Masaru Murakami M.D. (村上 優・日本側本部担当)

#### 1992年度までの主なボランティア・ワーカー（3ヵ月以上）

名前	職種	所属	期間
★安部 美智子	看護婦	三信会原病院勤務	1988年10月-1989年5月
喜多 悦子	医師	ユニセフ・ペシャワール事務所	1988年10月-1990年10月
鎌田 啓介	医学生	東北大学医学部（当時）	1989年1月-1990年8月
★石松 義弘	医師	元天心堂へつぎ病院	1989年4月-1991年3月
中田 正一	農業技術	「風の学校」主宰（故人）	1989年7月-1989年8月
★沢田 裕子	事務・通訳	福岡市役所	1989年11月-1990年6月
★藤田 千代子	看護婦	福岡徳洲会病院	1990年9月-現在
★吉武 英子	医師	札幌里塚病院	1990年10月-1991年5月
★松本 智子	看護婦	元神戸労災病院	1991年10月-1992年7月
★鳥村 教子	理学療法士	元下関市立病院	1991年10月-1992年2月
前田 裕之	X線技師	元熊本機能病院	1991年4月-1991年6月
★林 達男	X線技師	元粕屋新光園勤務	1991年10月-（定期滞在）
栗林 由美子	看護婦	熊本地域医療センター	1992年10月-1993年2月
長谷川 昭一	医師	新潟勤労者医療協会神田診療所	1992年11月-1993年2月
★倉松 由子	理学療法士	元国立多摩全生園	1992年12月-現在（1年派遣）
小林 晃	医師	庄内あまるめ病院	1993年2月-1993年3月
★豊崎 朝美	事務	ペシャワール会事務局（英語教師）	1993年3月-現在（1年派遣）
★ペシャワール会を通して派遣された6ヵ月以上の赴任者			

●1992年度中に  
寄付を頂いた団体

ありがとうございます

- 榎原こひつじ幼稚園
- 大牟田バプテスト学園光の子幼稚園
- 西南幼稚園
- 広島三育学院小学校児童会
- 筑紫女学院高等学校・中学校
- 福岡女学院高等学校・中学校
- 西南学院高等学校インターアクトクラブ
- 西南学院高等学校
- 明善高等学校
- 豊津高等学校
- 博多高等学校
- 田川工業高等学校建築科2の1
- 西南学院短期大学
- 梅光学院大学
- 西南学院大学経済学部ねクラス
- 西南学院
- 福岡女学院短期大学同窓会
- 福岡高等学校同窓会紅梅会
- 福岡高等学校17回卒関東地区同窓会
- 西南学院中学校母の会
- 西南学院同窓会
- 西南学院高等学校校母の会
- 福岡登高会
- 徳洲会 JAMSの会
- ベシャワール会八代友の会
- うら梅の会
- 城山荘職員一同
- アジアを考える会北九州
- シヨヒテイル会
- 熊本ベシャワール会
- ふくおか自由学校
- 国際ソロプチミスト福岡南
- 国際ソロプチミスト北九州西
- 福岡鶴城ライオンズクラブ
- 北九州同門ライオンズクラブ
- 名古屋ライオンズクラブ
- 福岡ライオンズクラブ
- 福岡西ロータリークラブ
- 福岡西ロータリーアクトクラブ
- 瑞穂ロータリークラブ
- 共同通信社
- 福岡市医師会
- 福岡県医師会
- 横浜市海外交流協会
- 日本アフガニスタン協会
- 北九州国際交流協会
- 国際協力サービス
- 八尾商工会議所青年部
- 青洲会病院
- 浅木病院職員一同
- 徳洲会野崎病院
- 沖永良部徳洲会病院
- 馬場病院とBBコンベ
- 九州中央病院看護婦寮一同
- 多摩全生園リハビリテーション科陶芸室一同
- 福岡ベタニヤ村教会
- 大牟田正山町教会学校
- 天神聖書教会
- 福岡聖書研究会
- 福岡有田バプテスト教会
- 津屋崎教会
- 佐賀めぐみ伝道教会
- 古賀五ヶ丘キリスト教会
- 日本キリスト教団幕張教会
- 日本バプテスト東三幡キリスト教会
- 田原バプテスト教会
- 西南学院バプテスト教会
- 筑紫野伝道教会日曜学校
- 平尾バプテスト教会
- 尼崎バプテスト教会
- 福岡キリスト教女子青年会
- 神戸多聞教会
- 福岡南教会
- 聖ヒンセン・シオ・ア・パウロ会
- 八幡鉄町教会
- 鳥栖キリスト教会婦人会
- 大名町カトリック教会
- 福岡中央教会
- 日本聖公会福岡教会
- 横日本リメイク通商
- 横日本標準
- 横九州産機
- ケーブルビジョン21
- 杉村包装資材林若葉会
- 横イケダ・オフィス・ピオ
- 井上調剤薬局
- 島嶼調剤薬局
- システム開発機

●1992年度会計報告

[収入の部]	
1. 会費及び寄付①	33,770,688
2. 事業収入 ②	645,000
3. 利息雑収入	454,524
計	34,870,212
前期繰越	1,022,582
合計	35,892,794
[支出の部]	
1. 現地活動費	24,977,536
1) JAMS 運営費③	22,403,159
2) 渡航通信費④	1,417,047
3) 国内活動費⑤	1,157,330
2. 広報費	1,810,122
3. 事務局費	2,145,519
計	28,933,177
次年度繰越	6,959,617
合計	35,892,794

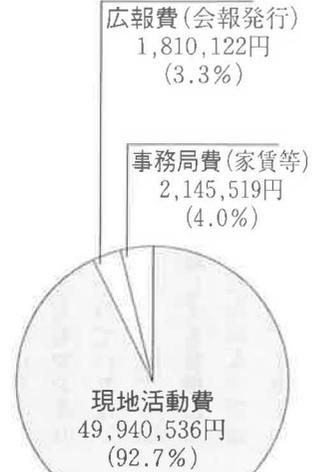
●1992年度特別会計

I 外務省 NGO 補助事業	
[収入の部]	
1. 外務省 NGO 補助金	15,467,000
計	15,467,000
[支出の部]	
1. JAMS 巡回診療所費	13,933,000
2. 車両購入費	1,534,000
計	15,467,000
II 国際ボランティア貯金配分事業	
[収入の部]	
1. 国際ボランティア貯金配分金	9,496,000
計	9,496,000
[支出の部]	
1. グラエヌール診療所運営費	9,496,000
計	9,496,000

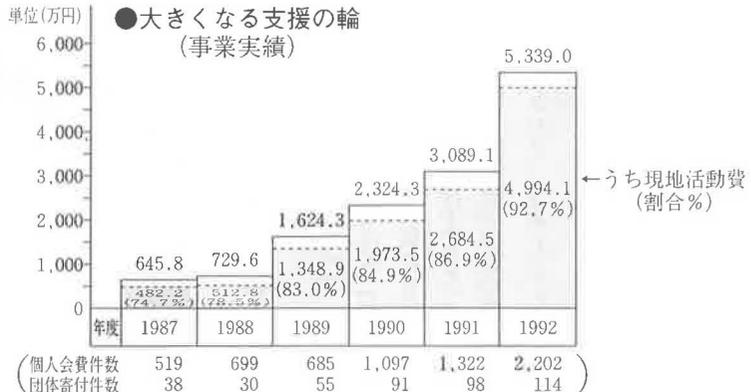
- ① 個人二、二〇二件 団体一四件
- ② 絨毯売却
- ③ 医薬品、医療機器費、JAMS 運営費
- ④ スタッフ渡航費、派遣諸費用
- ⑤ 国内研修費用、講演旅費等

92' 会計報告

●1992年度事業額 (支出ベース)  
53,896,177円



●大きくなる支援の輪  
(事業実績)



## ●ワーカー通信

### 患者さんのキャラクターに

#### 支えられて

ミッジョン病院  
理学療法士

倉松由子

#### 一日の流れができて

ペシャワールでは、四月も終わり頃になると、日中三〇℃を越えます。湿度が低いので、冷蔵庫に冷たいお茶を用意していて、しょっちゅう飲んでいきます。

ミッジョン病院らいセンターでの仕事は、人の後について見よう見真似、いきあたりばったりでやっていたのが、最近一日の流れが大まかに固定してきました。毎日全部の項目をやっているわけではありませんが、朝のミーティング、全員総出の包帯交換（主に足底潰瘍）、ティータイム、グループでやる手の運動訓練（男性）、靴の回転、菌検査のための皮下組織採取。午後は、個別の患者さんの感覚や筋力の検査、女性の患者さんの運動訓練などです。他のスタッフたち（レプロシ

テクニシャン四名、助手一名、藤田さん）は、それ以外に外来患者に対するらいのスクリーニング、投薬とその記録。入院患者への投薬（注射・点滴を含む）、検査の手配、術後患者の管理、らい以外の合併症への対処、記録の記入・整理など広範囲の仕事をこなしています。

#### 機能維持を図る手の訓練

手の運動訓練は、らい菌によって末梢神経を損傷され、筋力低下をおこし易い手の機能維持を図るもので、次の三つの要点で行っています。

①指を伸ばすマッサージ、②母指の対立（手の平から持ち上げて小指へ向ける）、③虫様筋肢位（指の第一・二関節を伸ばして第三関節を直角に近く曲げる）。

これを毎日人を集めてくり返すだけなら誰にもできるし、患者さんもこっちもマンネリになってしまいます。続けてやっていたら、少くとも入院期間中手の機能低下を防ぐのに役立つのですが（本当は退院しても習慣にしてやってほしい）。患者さんたちにとってはお互いに他にすることがないので、丁度よい時間つぶしになっている面もあるんですね。



宿舎でくつろぐ倉松(左)・藤田さん

#### 座を盛り上げてくれるクチイのおじさん

マンネリになりがちなのを救ってくれるのが患者さんたちのキャラクターです。新顔が加わると、皆と同じようにできないのを見て笑い、先輩が教えてあげようと二方、三方から手と口が伸びていって、パシエトゥー語は荒々しい感じなので、日本人から見ると怒鳴り合っているみたいになります。

山奥から出てきた人慣れのしていない患者さんほど、他人がやっているのを見て、そのまねをするのが苦手のようですね。初回でめげて、出てこなくなることもあります。何度

目かにもうまくできたら、「シャバーツシユノ（あっぱれ、よくできた）」と声をかけると、うれしそうにニンマリ笑顔になります。

古顔の中の変形の進んでいる人は、「訓練しないとこんなになってしまうぞ。」と屈託なく皆に見本をみせてあげていました。彼は、私がつい日本語で「ここ（此処）、ここ。」と指さしたりすると、ニワトリみたいだとニワトリの真似をして大笑いするし、その時間の最後には、よく「パーキスタン、アフガニスタン、ジャバニスタン、ばんざい！」と言って帰っていきました。このアハマッドおじさんはクチイ（パシユトゥーの遊牧民）で、悲しいことがあってもよくよよせず、いつも座を盛り上げてくれる貴重な人材でした。退院のとき奥さんが二人いるというので、「大変じゃないか？」ときいたら、「大丈夫だよ。」とニヤリとしました。

### 靴の相談に四苦八苦

患者さんのための靴は、らいセンターの一角に靴のワークショップがあって、職人三人（親方一人と徒弟二人）で靴を作っています。元締は、バッティというシニア・レプロシューテクニシャン（らい専門医療職員）が勤めています。英語が上手なバッティは去年から外

来担当で忙しいので、靴を作る相談をするときは、モチ（靴屋さんの意味、親方の名まえはムルタザ）とウルドゥ語で話さなければなりません。元々靴のことにそんなに詳しくはない私が、貧弱なウルドゥ語のためにさらに混迷の度を深めるわけです。

変形が殆どなくて足の感覚マヒが主な問題の足なら、靴底に硬いタイヤゴム、内部にうすい小型鉄板、中敷に弾性の強いスポンジを張った、釘を使わない靴（ペシャワールではサンダル）で、足底のキズは十分防げます。これはサイズ別に作りおきがしてあるので、



患者さんをケアする倉松さん

患者さんのサイズ合わせをするだけですみます。でも変形の進んだ足の靴をオーダーメイドで作ったり、既存の靴を改造する場合、こっちの試行錯誤のアイディアと、靴屋さんの側の靴を作る上での常識とを、どうお互いに相手にわからせるかが問題で、変なものが出来上がってしまうこともあります。あ のときモチの言ったことをこっちがちゃんと聞きとれていたらか、どういう目的でこういうふうにしてほしいのかを十分説明できたらとか、それにもちろん靴のことが、現地の事情がもつとわかっていたらとよく思います。藤田さんや中村先生に教えてもらいながらの仕事を、本当に自分の語学力が情けないです。しかし、モチや、それにもう一人英語が得意でない看護助手のサダカットが、多分私にとって最良のウルドゥ語の先生なんでしょうね。

### 女性部屋ではホツとします

それから、女性の患者さんの話をする、らいでない長期入院のケースで、ホマーレイ（Khumarai）という、リユーマチのために関節の多くが変形してしまった、二十代前半の女の子がいます。出身はアフガニスタンのクナール州で、アフガン内戦のため、隣り合っているパキスタンの北西辺境州に逃れてき

ました。家族の消息はわからず、こつちに來てから発病して、他人の家のやっかいになつていたそうです。午後女性病室にいくと、たいてい彼女の関節可動域訓練と筋力維持の運動をします。ウルドゥー語が少しわかり機転がきくので、パシュトゥー語しかわからない他の患者さんとのやりとりでこちらを助けてくれます。さらに、変形した手指で毛糸やビーズを材料にして、器用にきれいなアクセサリーを作るんですよ。手仕事をするようになってから、原因不明の腹痛が少なくなりました。女性の病室でおばさんたちと手の運動を一緒にしたり、ホマーレイの細工をながめたりしていると、同性の気安さがあつてほつとします。

### 大事なティータイム

こんなふう書いてくると、それなりに働いているように思われるかもしれませんが。でも、ミッシヨン病院らいセンターの現地スタッフと一緒にやっているといえるのは、朝のミーティング、包帯交換、ティータイム位です。後は一人で適当にやってみようと思えば勝手に動けるので、要するにつまみ易いところから仕事をしているのにすぎなく、へたすると自己満足で終わってしまう恐れだつて

あります。ティータイムもほかにはできません。病院では十時頃にお茶の時間があつて、記録室にスタッフが集まって小休憩します。日本人だつてい仕事のきりのいいところまでとか、今やっているのが終わつてからと、集まりに遅れがちで、時には飲まないで働いてしまいます。以前あるスタッフから、「パキスタン人とは一緒にお茶を飲みたくないのかと思つた。一緒に飲んでくれたとき対等につきあえるとわかつてうれしかった。」と言われたと藤田さんからきいて、仕事の途中でもきりあげてみんなとお茶を飲むようになりました。患者さんも「飲みにいきなさい。」といつてくれるし、ここではお茶の時間は人を待たせる立派な理由にもなるのです。怠け者の私には、だんだんお茶より仕事やサービスを優先する日本の方がおかしいような気さえしてきました。

包帯交換は、はじめキズの処置について全然知らなかつたので、必ず誰か他のスタッフに教えてもらつて一緒にやりました。あの程度一人でできるようになつてから、自分のペースで先にやつてしまつたり、後に残つて一人で黙々とやつていたり。これが理学療法領域になると、私のしていることは、今のところ殆どまわりから浮いている状態です。

らいセンターで理学療法担当になつてからは、レプロシーテクニシャンの中で一番若いシャマウンです。彼に意欲がないわけではなから、なかなか一緒にやれないのはこつちの言葉が足りないせいなのか、ぶつかる意欲が足りないせいなのか。話しをしていくとわからなくても、愛想だけよくしてうすら笑いをうかべているようではだめなんですねえ。とはいつても寄る年波で急にことばを会得できるわけもなく、とりあえず楽しくやっています。

### 鳥の鳴き声で

#### 一日が始まる

JAMSワーカー 豊崎朝美

ここペシャワールへ来てしばらく、朝五時頃必ず目がさめて、「どうしてなのかな？」と考えていたら、原因は鳥の鳴き声。鳥の鳴く声で目覚め、すがすがしい朝を迎える。と書くと、とても素敵な場所みたいだけど、実のところはとんでもない。ギヤーギヤーピーピー バサバサ カーカー ピピピピピピガサガサ ピヨピヨ……。私の部屋の近



JAMSに来た子供たちと

くに大きな菩提樹があり、鳥たちのねぐらになつていて、毎朝夜明とともに何百(?)何千(?)の鳥がいつせいに鳴きだして、そのうるさいこと。

ある日、そんな鳥の声で目が覚めて時計を見るとまだ五時ちよつと過ぎ、再び眠つて次に目覚まし時計のベルの音で目が覚めた。

「いやいやながらベッドの上に起き上がり、『そう言えば昨日の夜寝るのが遅かつたんだ。』と前の夜のことを思い出した。中村先生がミッションホスピタルの敷地内の日本人ワーカー用の家に訪ねてきて、藤田さん、倉松さんといつしよに仕事の打ち合わせ、そのほか色々話をして帰って行ったのが十二時三十分頃で、それからお風呂に入って、寝たの

が一時三十分頃、やはり眠たい。それでもなんとか起きて顔を洗うと少しはさっぱりして、それから軽く朝食を食べて出かける準備をしていると、JAMSのオフィスへ毎日送つてくれる、日本人ワーカー用のドライバがむかえに来た。

ここはイスラム教が生活のあらゆる面に強く影響していて、女性は気軽に外出できなくて、ドライバに外出する時はたのんだり、買い物なんかも色々たのんでいます。と簡単に書いていくけど、これが大変なんです。ウルドゥー語、パシュトゥ語が全く話せなくて、ペルシャ語で『何かを買って来て』どこへ行って』とか言う言葉をやつと覚えはじめた私にとって、英語の全く通じないドライバに何かを頼む時は毎回四苦八苦しています。

家から車で十二、三分の所にあるJAMSへ行って、昨夜中村先生に頼まれた事、日本への連絡、FAXで日本に送る書類等を確認していると、なんとなく空が曇ってきて雨模様の天気。『雨が降るとうつつうしくていやだな』と思つている時、JAMSのスタッフの一人が『今日は曇つていい天気だな』と言うのを聞いて、日本以外の土地にいる事を改めて感じました。

と、そんな考えにふけつていると、お昼の時間になり、JAMSで出されるアフガン料理(今日は、何かのスパイスと炊き込んだご飯の上に、トマト味の馬鈴薯と牛肉のはいつたスープみたいなものがかったのと、ナン)がいつもの通り、お皿に山盛りだされ他のスタッフの食欲を横目で見ながら、そしていつも悪いな〜と思ひながら、食べきれず半分程残してしまう。

午後からは私が仕事している部屋の他のスタッフは何となく暇そうで、私に色々ペルシャ語の単語を教えてくれるけど、数が多過ぎて頭の中にはほとんど残つていない。そうこうしているうちに、そろそろ帰宅の時間。いつものドライバがいないので、他のドライバに家まで送つてもらつた。

帰宅したら断水で、昨夜ためていた水を沸かしてお茶を飲みながら『どーしようかな?』と考へていたら眠たくなってそのまま寝てしまった。どのくらい寝たのか、何か騒がしい音で目が覚めてみると、またあのギャーギャー ピーピー バサバサ ピピピピ ガサガサ ピョピョ……etc. 日が暮れてきて、一斉に鳥たちがねぐらの菩提樹に帰つて来て、騒いでいる音。こうしてペシャワールでの私の一日は過ぎて行くのです。

# ミッション病院の人々

ペシャワール・ミッション病院看護婦  
福岡徳洲会病院看護婦 藤田千代子

ペシャワール会の皆様、お元気でしょうか。今年もまたペシャワールに暑い夏がやって来ましたが、時々空に雲が現われたり、そのうえに雨でもふるなら「天気がよくなった」と皆大喜びします。

つい先日突然大粒の雨がふり出しました。暑さでくたーつとなっていた病棟の患者達が、上半身裸になって、うれしそうに雨にうたれていました。さて今日は、ミッション病院のらい病棟で一一緒に働いているスタッフを紹介したいと思います。

- ①職種
- ②ミッション・ホスピタル勤務年数
- ③出身地
- ④なぜらいの仕事を始めたか
- ⑤仕事をしてみてもう感じているか
- ⑥日本へのメッセージ

**P. G. Massey** マセイ  
そんなに怒るな

- ①看護婦
- ②三七年
- ③パンジャブ
- ⑤とても良い仕事だと思ふ。傷の手当てをしたり、

手術をしたり、ソーシャルの仕事もある。はばの広い仕事だ。

⑥パキスタンのらいの人たちのために、今までのように、人を送ってほしい。日本の人たちを家族のように思っている。

【藤田】P. G. Massey は、以前M.H.のオベ室の婦長さんだ。三年前にらい病棟へ。スーパーバイザーとして来ました。高齢であり、何事も、ゆつたりゆつたりしているの、私はすぐカッカツとなりませんが、そのたびに「私はあなたを、娘のように愛している。だから、そんなに怒るな」と、なだめられる。最近ちよつと病気がち。

**Sharif Batti** シヤリフ・バッティ  
患者が喜んで、それでよい

- ①レプロシータクニシャン（らい診療員）
- ②らい病棟二七年
- ③ペシャワール
- ④以前、英国人ドクターが働いていて、週に一回ピール・ババに行き、治療の必要ならいの患者を連れて来ていた。そのころ、看護士はたくさんい

だが、レプロシータクニシャンは、一人もいなかった。タクニシャンになれば、らいの治療が出来る、ドクターにすすめられ、トレーニングを受けた。

⑤らいの患者は（特に、医療従事者に）偏見を持たれている。私がかここで働くことによつて、患者が喜んでるので、それでよい。

⑥医療活動を行なうのに、すべてが足りなかった。私たちに必要なものを与えてくれたのでとても感謝している。活動が中止になったら、貧しい人が治療を受けられなくなる。

【藤田】日本人びいきの彼は、日本から客人が来ると、私たち日本人よりも、あついてもなしをする。仕事に関してはとても有能でよく相談をもちかけるので彼の仕事はふえるばかり。

**Shareef shad** シヤリフ・シャド  
神がドクターを送ってくれた

- ①レプロシータクニシャン
- ②らい病棟二七年勤務
- ③ペシャワール出身
- ④結核治療の仕事をしていたが聖書でらいの事を読んで、気の毒に思いらいの仕事を始めた。
- ⑤患者と一緒にいると、困っている人の手助けをすることが、嬉しい。
- ⑥らい病棟は、はじめ一五床しかなかったが、今では六十床になり、多くの患者が入院治療出来るようになった。神様がドクターナカムラをここに

送って下さったと思っている。

パキスタンでは、女性が外で働くことがむずかしいので、女性患者のために、女性ワーカーを送ってほしい。

〔藤田〕この人とバツティは、昔から一緒に仕事をしていて、患者の治療のため、ペシャワールから遠い地区、また、山の中などにも行って、頑張ってきたようです。最近、若いテクニシャンたちが、フィールドに行った時、診療を拒否されて家に入れてくれなかったが、シャリーフとバツティと一緒に仕事をしていると話したら、態度がころっと変わって、あついてもなしを受けたそうだ。

Shakeel Naz シャキール・ナズ  
神が必要とされた

- ① レプロシードテクニシャン
- ② らい病棟十一年勤務
- ③ パンジャーブ出身
- ④ 医療関係の仕事に興味があり、おじがレプロシードの仕事をしていたので、神が私にここに必要とされたと思っています。
- ⑤ はつきり言って、私は自分の生活のために仕事をしている。
- ⑥ 患者たちのために日本の皆さんにとっても感謝しています。

〔藤田〕彼は、多種の仕事を持っている。配管、配線、電器製品のとりつけ、そして歌手でもある。毎年クリスマスにはよく出演がある。作詞作曲し

た歌のテープもある。ミッション病院の仕事の時はいつも彼の歌がひろうされる。この七月から三ヶ月間、レプロシードのトレーニングのためカラチへ行く。

Shanaon Batti シャマーン・バツティ  
愛情を送って下ろす。

- ① レプロシードテクニシャン
- ② らい病棟五年勤務
- ③ ペシャワール
- ④ 患者たちは、時々家族から拒絶されていると、聞いていた。その人たちのために働きたいと思った。
- ⑤ らいに関する仕事が好きで、今楽しみながら働いている。
- ⑥ 患者たちは助けが必要です。あなたがたの国から、愛情を送って下さい。

〔藤田〕スタッフの中で、一番若い彼は、今とても張り切って仕事にとりこんでいる。

Sadakat Khan サダカット・カーン  
教わったことを誇りに

- ① アシスタント
- ② 十年勤務
- ③ ペシャワール
- ④ 神が決められた運命
- ⑤ 喜んで働いている。患者の傷が良くなるのが嬉

しい。

⑥ らいの患者のためドクター・ナカムラやドクターを支えている日本の人々に、ありがとうと伝えたい。

〔藤田〕スタッフの中で、ただ一人のイスラム教徒。大家族であり(二十人以上)、生活苦からか、時々、日本で働きたいと言う。ドクター・ナカムラに三ヶ月みっちり傷の手当てについて、教わったことを誇りにしている。

\* \* \*

「またやってるな」

Dr. Usman Ebrahim (ウスマン・アブラハム) は今らしいについて勉強中。とても気のいいお医者さんです。他にくつ職人の Moraza (モルタザ)、そうじをしてくれる Hamida (ハミダ) と Hamid (ハミド) たちがいます。

病棟ではだいたい毎日どこかでスタッフ同志、スタッフと患者、患者と患者同志で言いあらそいがあったり、つかみあいのケンカがあったりして、にぎやかです。はじめのうちは、そのいきおいにびっくりしたり、悲しくなったりしましたが、最近はまだやってるな、といった感じです。スタッフの誰かが、私に言いました。毎日大声でケンカするのは良くないが、時々だったらおたがいの健康のために良いと。

# 中村医師の男振りに喝采！

●中村 哲著 『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）を読んで

古 叟 正 夫

（月刊『ハルブーザ』編集長）

本書によって初めて知ったが、アフガニスタンとパキスタンの国境山岳地帯はらしい多発地帯なのだそうである。著者の中村医師はパキスタン北西辺境州政府のらしい根絶五か年計画に協力するため、最初はパキスタンの国境の町ペシャワールで医療活動を行い、さらに進んで、現在ではアフガニスタン国内のらしい多発地帯に診療所を進出させるまでになった。

## \*らいとサンダル

本書は、一九八四年にペシャワールに着任して以来現在まで約一〇年間に及ぶ、中村医師を中心とする医療活動の記録である。そして中村医師の活動を資金面と人材面で支えるのが、福岡市に事務所を置く「ペシャワール会」というボランティア団体である。

らい病棟の入院理由の約七〇パーセントが、足底に穴があくらしいの合併症だった。患者の

履物はとみれば、固い革に釘をふんだんに打ちこんで修理を重ねたサンダルで、これが傷の原因である。欧米のミッションがらい患者用のサンダルを行きわたらせようとしていたが、パシユトゥン患者らは伝統的でないらしい用サンダルを好まず、金に換えてしまったりして、なかなか馴染まない風潮があった。中村医師は苦心のすえ、パシユトゥンの伝統的サンダルを改良したらしい用サンダルを開発した。これだと土地の靴屋が製造でき、安いので、日本からの小口の援助で補給を続けることができる……。

## \*対立

人間のいる所、必ず対立がある。古参キリスト教徒スタッフとイスラム教徒スタッフとの折り合いの難しさ、スタッフと病院との対立、病院とイギリスの宣教団体との対立、イギリス人グループとドイツ人グループとの対



患者は谷奥の村からやって来る

立など、らい治療以外の目的（例えばキリスト教の宣教）を一切持たず、個人の立場を主張せず、ひたすら治療に専念するのが中村医師のやり方である（著者はふざけて「無思想・無節操・無駄」と言っているが）。これによって相手が警戒心を解き、困難な問題に自然と道が開けていくことがいくつものエピソードの中で語られる。

一九八八年四月、アフガン和平協定が成立すると、中村医師はアフガニスタン国内に診療所を進出させる計画を立てる。アフガン人の人材二〇人を確保し、教育し準備する。そ



ヌーリスタンの渓谷

して一九九二年四月、難民がアフガニスタンに帰還を始めると、帰還する難民と一緒にアフガニスタンに入り、スレイマン山脈の向う、ダラエ・ヌール渓谷に診療所を設立した。ここにも沢山の問題が待ちかまえていた。ゲリラ戦が終った直後のこととて、住民がみな銃を持って居る地域に、丸腰で大丈夫か。心配顔のスタッフたちに、非武装こそ最強の武器だ、と中村医師。この山岳地帯の部族から見れば、アフガン人スタッフは完全なよそ者である。どうしたら笑顔で迎えてもらえるよう

になるだろうか。住民に我々の不転の決意を示せ、と中村医師。スタッフは励まされ、診療所は遂に山の住民に笑顔で受け入れられるようになる。ここで読者は中村医師の男振りに喝采を送らずにはいられないだろう。

### \*困難な時期

しかも中村医師たちの活動物語は、実に困難な時期に行われたのである。すなわち、中村医師のペシャワール着任はソ連軍・アフガン軍とゲリラが死闘を演じていたまっ最中のことである。例の靴屋をスタートさせたのは、一九八六年から八七年にかけてペシャワールで、パキスタン航空事務所の爆破テロ、小学校の爆破テロが吹き荒れた頃だった。一九八八年四月にアフガン和平協定が成立し、二〇〇〇もの難民援助団体がペシャワールに殺到したが、九一年に「悪魔の詩」問題が起ると、ペシャワールのイスラム教徒のヨーロッパ人に対する感情が悪化し、イギリス領事館が爆破され、ムッラーに指導されたアフガン難民約一万人がイギリス系のアフガン復興援助事務所を襲撃する事件が起った。続いて一九九一年一月に湾岸戦争が起ると、スウェーデン難民委員会の主要メンバーが爆殺され、国連難民高等弁務官事務所に爆弾が投げこまれ、

国連の大規模プロジェクトが次々に閉鎖され、ペシャワールからヨーロッパ人の姿が消えた。中村医師がアフガニスタンに診療所を進出させたのは、実に、ペシャワールからヨーロッパ人が消えた後だったのである。

### \*現地

ヨーロッパ人が撤退したのに、中村医師だけが前進することができたのはなぜだろう。診療所のらい病患者兼門衛のアブドゥル・サタールの死、診療所を訪れた母娘三人連れの話など、本書に散りばめられた患者の人生への暖い限射し。診療所でスタッフとして働く土地の人々。何ごととも現地ふうに合わせて働く中村医師の努力。こういった事柄が解答を得るヒントかもしれない。折角の国際協力が一人よがりにならないための秘訣を求める人は、本書からそれを存分に汲みとることができる。

また、中村医師が通ったスレイマン山脈のミタイ峠は、おそらくアレキサンダー大王がインドに侵入する際に通った古い道である。本書に描かれたパシトゥン人たちの暮しぶりも興味深い。シルクロード好きの人々にとっても見逃せない一書である。

●事務局だより

\*藤田さんから電話があり、この夏は山岳地帯での一月ほどのフィールド・ワークの後帰国するので、総会には出れない、とのことでした。彼女の手さぐりしながら、一歩一歩触知して世界を拡げてゆくような話を聞けないのは残念ですが、頑張つて欲しいものです。

\*ペシヤワール会もこの九月で発足十年になります。十年が長いのか短いのか、アフガニスタンを流れる時間の尺度からみれば、うたかたのようなものに過ぎぬかも知れません。しかし、高度消費国ニッポンの表層を流れた泡のような十年の中であつて、あのゆつたりした時間とそこに生き死にする人々を知り得たことは、ほとんど僥倖と言えようような気がします。\*この十年を振り返る本の出版も考えています。ゆつくりゆつくり行きましよう。

\*中村先生の著書『ダラエ・ヌールへの道』（仮題・予価一八五四円 石風社）が九月に刊行されます。世に喧伝される「国際貢献」を問い直すだけでなく、「現在」を生きたる人間の「存在」そのものを問い直す、ラディカルな書です。予約受付中です。『ペシヤワールにて』は在庫切れでしたが、併せて増刷の予定です。

ヤワールにて』は在庫切れでしたが、併せて増刷の予定です。

〔◎村から〕

◎が発足してから早や十年。その歴史の大半を目標してきた（魔女みたい）者として、感慨無量の想いと共に、「よー続いたなあ」という驚きと言うか、呆れるというかそんな想いが交錯しています。でも、◎を知らずに過ごした十年よりも、ずっと幸せで豊かな十年だったと間違いなく思います。しかし、年とともに衰える体力には抗しがたいものが…。『若い力』募集です。べの平均年齢を誰か下げてください。

\*ペシヤワール会会則によると会報は年四回発行となつている。通常、年四回ならば三、六、九、十二月発行が望ましいのだが、そうでないことは会員の皆さん既にご存じの通りである（最後の十二月だけは美しく帳尻があつているが、その理由はいろいろと考えられる。謙虚で奥床しいワーカー達の性格、また、自然を尊び、常に親しもうとする◎村の体制も遅れてしまう大きな要因であろう。決して、編集担当の怠慢などではないと思うのであるが…。（文）

ペシヤワールにて [増補版]

—— 癩としてアフガン難民

中村哲 四六判上製 定価一八五四円  
パキスタン・アフガンの地で、らいと難民の診療に従事するひとりの医師が、高度消費社会を生きたる私たち日本人へ向けて放つた痛烈なメッセージ

石風社

福岡市中央区大名一丁目二十五  
電話 〇九二七二四 四八三八

アフガニスタンの

診療所から

中村哲 B6判並製 定価一〇〇〇円  
国連や欧米NGOが撤退する中、アフガン人スタッフと共に国内診療所を開設するまでの苦闘の記録。国際協力のあり方を根底的に問う。

筑摩書房

東京都台東区橋前二丁目一四  
電話 〇三五六八七二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとられず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE  
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇、二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二一 三七二) 内におく。